

わたしの 私のビスケット

あなた方に少し前に空港で起こったお話をしましょう。私はそこから多くのことを考えさせられました。

それは、空港で飛行機の出発を待っている企業家の女性でした。彼女は、出発便の画面を見ると、彼女の乗る便が1時間遅れることがわかりました。「まあ、何をしようかしら。近頃、ついてないわね。」と彼女は独り言を言いました。「小説を買って、待つことにしましょう。」と、キオスクへ行き、最近はやっている小説を一冊と、ビスケットも一箱買いました。

彼女は待合室へ行き、出発便の画面を見ることが出来る座席に座りました。バッグから小説を取り出して読み始めました。5分ほど過ぎたところで、彼女は、一人の若者が横にある座席に座り、雑誌を読み始めたのを横目で見ました。

二つの座席のあいだには、コーヒーや食べ物かなにかを置くための小さなテーブルがありました。女性は本を読み続けました。

しばらくすると、「なんて退屈なの、この小説は。ありきたりね。」とおもいました。そして、テーブルの上にあった箱からビスケットを取るために手を伸ばしました。それを一口かじって、読書続けました。そのとき、横に座っていた若者もまた手を伸ばしてビスケットをつかみ食べるのを見ました※。「なんて厚かましいの。私のビスケットを一つ食べてしまったわ。」とおもいましたが、恥ずかしさから何も言いませんでした。女性は、ときどき出発便の画面を見て、ビスケットをさらに食べながら小説を読み続けました。しかし、ビスケットを食べようとしてつかむたびに、横の若者が同じことをしました。

「なんてお行儀が悪いんでしょう、この若者は。私のビスケットを了解もなくとっていくわ。少なくとも何か言うこともできるでしょうに。」と考えていました。しかし、何か言う勇氣はありませんでした。かなりの時間が過ぎましたが、まだ、画面には飛行機の出発時間が

ひょうじ じょせい どくしょ わかもの さいご
表示されませんでした。女性は、読書をしながら、若者が最後のビスケ
ットをつかみ、それを二つに割って、一つを彼女に差し出すのを見まし
た。「なんてずうずうしいの。最後の一枚まで。」彼女は、彼を見もせ
ずにビスケットをつかみ、怒って別の待合室に行ってしまいました。

「このごろの若者ったら、どうなってるの。しつけがなってないんだか
ら」と繰り返し言いました。

ようやく出発便のアナウンスが流れると、彼女は急いで飛行機に乗り、
席に着きました。

「やっと、誰にも邪魔されずにゆっくりと小説が読めるわ。」と彼女
は思いました。しかし、彼女はものすごく驚きました。

バッグのなかで小説を探していると、自分が買ったビスケットの箱を
見つけたのです。

「どうしてこんなことになったの？ということは、私が食べていたビ
スケットは私のものじゃなくて、隣にいたあの若者のものだったって
こと。」

「なんて恥ずかしいんでしょう。しつけがなってないのは私だったわ。
ああ、恥ずかしい。もう今となってはあやまることもできないわ...」

※ La mujer vio como el joven cogía la última galleta.
como : saber や ver のあとの従属節を導く接続詞